

ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書

文学部3回生社会学専修 許 蔚欣

ストラスブール大学の学生とのワークショップに重点を置いて報告する。

ワークショップはストラスブール大学の日本語学科の学生との共同発表であり、ストラスブール大学の参加者は主に修士の一年生と二年生であった。学生たちは紛争と平和をめぐってそれぞれ関心を持つテーマについて発表する。ワークショップの全体的な流れとして、両大学の学生の発表テーマによって4つのセクションに分けられ行われ、発表ごとに質疑応答の時間が設けられ、最後にすべての発表が終わった後、すべての発表を振り返る議論が行われた。

最初のセクションにヨーロッパ圏における紛争に関する発表が行われた。最初の発表はストラスブール大の学生の発表で、ヨーロッパ圏における移民集団と社会の対立に関する発表であった。発表者は三つの側面から移民に対する不平等扱いを論じ：多文化政策における不平等、分離政策における不平等とどうか主義における不平等について論じていた。発表後の議論もとても活発で、ヨーロッパ諸国の中でも国によって移民政策が異なることがわかった。例えば、ドイツでは「移民」というカテゴリーがなく「難民」しかないため、「移民政策」がないという例が挙げられた。また、二つ目の発表は京大生の発表で、EUを参考しアジア圏で連合を組むことに関する考察であった。

セクション2はシリア騒乱と北方領土の領土問題に関する発表で、両方もストラスブール大の学生の発表であった。また、セクション3では主に我々京大生の発表であり、DMZ映棚画祭と情報戦争に関する発表と平和と狂気についての発表であった。私の班はDMZ(非武装地帯)を発表し、そして北朝鮮とアメリカの情報戦争について議論してみた。発表後、ストラスブール大の学生から面白いコメントをいただき、先生方からも情報戦争において新たな考え方についてコメントしていただいた。情報戦争において、情報の検証や情報の流通と情報発信側の目的などに気を配らなければならないことを知り、大変勉強になった。

セクション4は主に歴史問題に関する発表が行われた。京大生代表は「日本と韓国の歴史教科書から見る歴史認識問題」について発表し、ストラスブール大の学生はインタビュー調査でまとめたドキュメンタリーを通じて慰安婦について発表した。

今回のワークショップではドキュメンタリー映画を扱う発表が二つあり、紛争と平和というテーマにおいて映画やドキュメンタリーが果たしている役割を実感した。最後に全体的に議論が盛り上がり、予定より時間が長引いてしまった。